

『堀河百首』の「虫」の歌 田辺愛子

『堀河百首』は、和歌史において高く評価されている。それは組題百首の完成された型といわれ、中世和歌に様々な影響を及ぼしている。特に院政期以降、題詠という和歌創作の意識が著しく発達することによって、歌題に対して何を詠むべきかというある一定の美的世界の創造が要請され、それが様式化、一般化されるに従って、その歌題の「本意」が生じ、それが歌人達の意識に定着してきた。『堀河百首』は題詠歌の発達の初期に成され、同百首がその題詠において「歌題」に与えた観念が後世の題詠に大きな影響を与えたと考えられる。

本稿は、『堀河百首』がどのような観念をその歌題に与え込んだかを、つまり、同百首の歌題のもっている本意はいかなるものかをさぐり、後世への影響の度合いを考えてみようとの試みである。さて、『堀河百首』の歌題がどのように詠まれているか、その具体的な方法としては歌材・発想・修辞などの類型分類、表現形式の整理等があり、それらによって同百首の歌題の本意を検討していくことにする。なお、『堀河百首』の歌題は当然すべてを整理し検討せねばならないが、今回はその一つとして歌題「虫」をとり上げて検討

する。(『堀河百首』は群書類従本を使用し、同百首の歌のアラビア数字はその通し番号である。)

「虫」は、『万葉集』において四季に分類されている巻八・十に秋季の素材として既に詠まれ、人間の実生活に即した季節の風物として、当時の人々に秋季の歌材と見なされていた例を見出すことができる。そして、人間の情趣生活に即応し、和歌における四季の美意識が緻密になるに従って、「虫」は秋の季節と結び付き、秋の季節感を構成する重要な歌材となっている。また、漠然と「虫」を詠み込むのではなく、具体的な虫の種類たとえば松虫、きりぎりすなどというように類別されて、はやくから各々が歌材として独立して意識され、歌題化もはやい時期になされている。

歌合によって歌題の展開をみると、歌合史の最初期の『寛平御時后宮歌合』『是貞親王歌合』において「虫」は歌題として独立していないが、秋季の題の歌材として詠まれている。萩谷朴氏著『平安朝歌合大成』から「虫」を歌題とした歌合を上げると次のようである。

〔延喜四—廿二年〕秋東宮保明親王帶刀陣歌合 蟋蟀・松虫

天曆十年八月十一日坊城右大臣師輔前裁合 蝨

天徳三年九月十三日庚申中宮女房歌合 蝨・蝸・松虫

天禄三年八月廿八日親王内親王前裁歌合 虫の音

寛和元年八月十日内裏歌合 虫

寛和二年六月十日内裏歌合 松虫

永延二年七月七日藏人頭実資歌合 鈴虫

天喜二年秋藏人所歌合 虫・蝨

〔天喜五年〕八月六条齋院祿子内親王歌合 鈴虫・松虫・蝨・蝸

虫

このように「虫」は秋季と結び付き、単に「虫」のみでなく、類別細分化された各々の歌材が極めてはやい時期から秋の季節の「歌題」として定着していたと推測することができる。

そして、「虫」という歌題は視覚的に詠むよりも、虫の音や鳴く声という聴覚的な要素の強い歌題として意識されている。

『堀河百首』の「虫」の歌題は前述のように、既に類別細分化され、きりぎりす・松虫・ひぐらし・蝸虫・鈴虫・虫などを用いていることから考えてみると、総括した総合的な歌題であり、またそれら各々が歌題として独立して詠まれている点からも多様な詠み方を包含していることが知られる。しかし、それらは虫の声によって秋の悲嘆を詠むことを主とし、鳴く虫に自己の心情を投影させていることに共通する視点が置かれている。

そこで、『堀河百首』の「虫」の歌題のもとに詠まれている十六首を虫の種類別に分けてみると、虫八首・松虫三首・鈴虫二首、ひ

ぐらし、蝸虫、きりぎりすが各々一首ずつである。それら十六首の歌を虫の種類別に分類整理して多少の検討を加えてみたいと思う。

〔鈴虫〕

「鈴虫」を詠んでいる歌は十六首のうち、次の二首である。

819 みかりする片野ののへの鈴虫の恋する声やふりはてゝ鳴く

820 鈴虫の声する野へをたつねれば心にもあらぬ花をみる哉

この二首は「野辺」「鈴虫の声」を用いて詠まれている。

「鈴虫」は古今集時代から歌材として詠まれ、「鈴虫」に鈴を懸け、縁語として「ふり」を用いる類型的な作品が多くみられる。例えば「忠岑集」（『私家集大成』中古I 38）に次のような歌がある。

138 さむきよはふるふ／＼もなかなくにすゝむしとのみなとかいふ
らん

139 や人のすゝむしとのみいふことはこゑふりたてゝなけはなり
けり

820の歌は思いも寄らない花との出逢いを詠み、野遊びの歌と思えるが『源氏物語』帚木の巻の夕顔との出逢いを想起させられ、物語のある世界を踏襲して詠まれた歌とも解せられるであろう。

819の歌は、やはり平安時代からの表現技巧である「鈴虫」に鈴を懸け、縁語として「ふり」と「御狩」の縁語や懸詞を用いて野辺で鳴く虫を表現している。「鈴虫」の鈴が鷹狩の鷹の尾ふさに付ける鈴との懸詞であり、「恋する」のこゑもやはり鷹が木の上に居ることの木居を懸けている。この歌は野辺の鈴虫がさかりと鳴いていることを歌意としながら、鷹狩の縁語や懸詞を巧みに詠み入れた複雑

な技巧が成されている。

このような「鈴虫」の鈴と「御狩」の縁語と懸詞を用いた詠法で勅撰集の初見は『後拾遺集』267の大江山資朝臣の歌で

鈴虫の声を聞きてよめる

とや帰りわか手ならしはし鷹のくると聞ゆる鈴虫の声

に見られ、「鳥屋」「はし鷹」という鷹狩の縁語や「帰り」に「飼り」の懸詞を用いて詠まれ、「小鷹狩」という秋季に行なわれる宮廷行事に関連した素材を用いている。

また、『堀河百首』と同時代の『永久四年百首』に「鈴虫」が設題され、その七首の中にも同様に類型的な詠み方をした歌が二首みえる。

鈴虫の声をすゝかと聞からに草と鷹そおもひてらるゝ
御狩のになく鈴虫をはしたかの草とりて行音かとそ聞

で、二首とも鈴虫の草叢で鳴いている情景と鷹の「草とる」様子とを重ね、「鈴虫」と「小鷹狩」の具体的な素材を組み入れて詠む傾向がみられる。

このように「鈴虫」の鈴と鷹の尾に付いた鈴と懸け、秋季の宮廷行事である小鷹狩の縁語や懸詞を用いた技巧的な詠法は比較的新しい時期に一般化されたのではないかと思われる。

〔松虫〕

「松虫」を詠んでいる歌は次の三首である。

821夕暮はすきうかりけり秋の野に我松虫の声ならねとも

822たのめ置しことの葉により恋草や人松虫の栖なるらん

830あはれてゝ人影もせぬ故郷に猶まつ虫の声そたえせぬ

「松虫」は勅撰集において『古今集』より歌材として用いられ、「松虫」に「待つ」を懸け、恋愛の要素を内包させて秋のはかない悲しみの感情を詠んでいる作品が多くみられる。

200君しのふ草にやつるる故里はまつ虫の音ぞかなしかりける

(『古今集』)

263風さむみなく松虫のなみたこそ葉いろとる露とおくらめ

(『後撰集』)

『堀河百首』の三首もまた「松虫」に「待つ」を懸けて詠むという伝統的な発想に拠ったもので、「松虫」を擬人化し、哀感に満ちた虫の鳴き声に人を待つという微妙な心情の動きと秋のはかない悲しみとを結び付けて一つの観念的世界を織りなしている。それは単に自然詠でなく、いずれも恋愛的色彩の濃さが歌意に盛り込まれている。

そのうち822・830の二首は「松虫」に「待つ」を懸けているのみでなく、822の歌は「ことの葉」と「恋草」という縁語や「恋草」に恋を懸け、830の歌は『古今集』200の歌を発想の原形として「あはれてる」「故郷」の語を連ねた技巧的な歌である。

このように、「松虫」と「待つ」を懸けて詠むという伝統的な詠法を踏襲し、さらに表現技巧をこらして詠むといういたって観念的な詠み方をしている。

〔ひぐらし〕

「ひぐらし」を詠んだ歌は823の歌のみである。

823山里はさひしかりけり木枯の吹夕くれの日ぐらしの声

「ひぐらし」を詠んだ勅撰集収載歌の多くは「夕暮」「日暮」

「山里」「山」という、時刻と場所の素材を取り合せて

205 ひぐらしの鳴く山里の夕暮れは風よりほかにとふ人もなし

〔古今集〕

254 日ぐらしの声きく山のちかければきつるなへにいり日さすらん

〔後撰集〕

夕暮の山里で鳴くひぐらしによって秋の寂寥さが詠まれている。

823の歌も、やはり前の二首と同様な素材を用いて秋の寂寥感を自然の描写によって表現されている。

八代集において「ひぐらし」を歌材とした歌と「虫」を主題とした歌との関係をみてみると、『古今集』(204・205)及び『後撰集』

(254・255・256)には「ひぐらし」を詠んだ歌が秋上の部立にみえ、

虫を主題とした歌群の中に見出せる。しかし、『拾遺集』では秋季

の副的な歌材として用いられた歌があるのみで虫を主題とした歌

群に配列されていない。『金葉集』に至ると、夏の部立にみえ夏季

の終りの歌材として詠まれていて、虫の歌群に入っていない。『詞

花集』には「ひぐらし」を詠んだ歌がなく、『千載集』や『新古今

集』では夏季の終りと秋季のはじめという季節の変わり目の歌材とし

て用いられているが虫の歌群と関係なく配列されている。このこと

から「ひぐらし」は『古今集』、『後撰集』以後、虫の歌群とは別

に独立した歌材として詠まれ、意識されていたと考えられる。

また、この823の歌は『千載集』に入集され、秋下の部立のはじめ

に位置し、秋を主題とした歌としてとられ、虫を主題とした歌群と

は別に配列されている。

次に、『平安朝歌合大成』に収載されている歌合において「ひぐ

みである。その他、『堀河百首』以後の歌合において「ひぐらし」

を歌題にした歌合がなく「虫」及び「蟬」の歌題にて「ひぐらし」

を詠んだ歌を見出すことが出来ない。

このようなことから考えてみると「虫」の歌題にて「ひぐらし」を詠んだ823の歌は極めて特殊な例であることが指摘できる。

〔轡虫〕

「轡虫」を詠んだ歌は十六首のうち、この一首のみである。

818 駒なへて麓の野へにたつぬれはをくらにすたくくつはむしかな

「轡虫」は勅撰集及び十世紀の末に成立し、和歌の歌材によって

類別収集され、題詠の手引としての性格をもったであろう「古今和

歌六帖」の動植物の部の虫の項目に「轡虫」を詠んだ歌を見つける

ことが出来ない。「轡虫」を詠んだ初見の歌は『曾丹集』八月上

(「私家集大成」中古1105)に

219 くつはむしゆら／＼おもへあきののゝやふのすみかはなかきや

とかは

とあり、詠歌素材を拡大したと言われる好忠が「轡虫」を新たに詠

んだものと推察される。

歌合の歌題としては「天喜五年」八月六条齋院祓子内親王歌合に

「轡虫」がみえ、歌合の歌題とされたのは唯一の例とされている。

(「平安朝歌合大成」四168参照)

左

中務

9 待つ人のある夜なりせは轡虫駒ひきとめて来ぬ聞かまし

右

讃岐

10 草かくれ駒並めてゆく旅人の聞きわたさるる轡虫かな

とあり、その歌合に「駒」「轡虫」の縁語・懸詞を用いて詠んでいる。

818の歌は、やはり「駒」「轡虫」の縁語・懸詞を類型的に用いて詠み、「轡虫」の轡や「をくら」の鞍という馬具を懸け、技巧的で機知に富んだ歌境を創り上げている。

『堀河百首』の歌題「駒迎」の中に「轡虫」の縁語・懸詞を用いて詠んだ歌が見える。

77鳴なるは相坂山のくつは虫駒迎する人やきくらむ

また、『堀河百首』の女流歌人で、前斎院肥後の家集である『肥後集』（「桂宮本叢書」第十巻所収）に

右大臣、左大将とましゝころ、あふきのゑにおとこのきて、

むまにとねりくさかりてかう、これにうたよめとありしかはくつはむしおとなふめるはわかせこかこまにもむくらかりてかふらん

とあり、扇の絵の世界を詠むという、かなり遊技的な性格をもった歌にも同様な技巧で詠んでいる。

このようなことから「轡虫」は比較的新しい歌材であり、単に「轡虫」を詠むのではなく、縁語・懸詞を用いた詠法によって「轡虫」の歌材を詠む傾向が金葉集時代にはかなり一般化されていたと考えられる。

〔きりぎりす〕

「きりぎりす」を詠んだ歌は次の一首のみである。

87菝秋のうければわれもさそ長き夜すからなきあかしつる

『万葉集』の巻八・十に「蜻蛉」が詠まれ、それは今日でいうこ

おろぎの類でなく、秋鳴く虫を広くさしている。しかし、『延喜四一廿二年』秋東宮保明親王帯刀陣歌合（『平安朝歌合大成』一31参照）において「蜻蛉」という歌題に「きりぎりす」が詠み込まれている。このことから、平安時代初期に「蜻蛉」と「きりぎりす」の混合が認められる。

「きりぎりす」は勅撰集において『古今集』よりみられ「秋の夜」という時間的素材を組み入れている。

196きりぎりすいたくな鳴きそ秋の夜のなき思ひはわれそまされる
（『古今集』）

198秋秋も色つきぬれはきりぎりすわか寝ぬことや夜はかなしき
（『古今集』）

秋の長き夜のせつなさを歌意として、きりぎりすと自己とを対比的に見ることによって心情を表白している。

87の歌は前記の二首を発想の原形とし、やはり、きりぎりすに自己の心情を添加させて詠み、かなり人事詠的色彩の濃い歌である。この歌は『古今集』以来の詠法に寄った歌と言える。

〔虫〕

「虫」を詠んだ歌は十六首のうち八首ある。特に、前述のように「虫」という歌題のもつ固有の觀念として、虫を擬人化し「鳴く」に「泣く」を懸けたり、虫の鳴き声の哀れさと秋の静寂さに自己の心情を添与させて詠んだ作品が多くある。それら八首の中にも『古今集』以前から詠まれてきた伝統的な発想を踏まえている。

825夜をかさね音をなく虫の哀さに大かた秋はえこそねられぬ

831秋の夜の虫のねきけはいとしくわか物思ひもよほされけり

この二首は秋夜の哀感と虫の音に拠って触発される物思いを歌意としてゐる。

また、虫がたくさん鳴いている状態を秋の風物の具象によつて詠んだ歌として次の二首が上げられる。

826 山里の葎まじりのかるかやのみたれもあへぬむしの聲かな

832 露をくもみうつろふ花やおしからん草村ことにすたくむし哉

そして、次の四首は深まりゆく秋の哀感を主とし、虫の音(声)

と秋の推移と対応させながら詠むという類型的な作品である。

817 萩のえの下葉を宿にする虫はうらかれてゆく秋や恋しき

824 よはり行虫の声にや山里はくれぬる秋のほとをしるらん

828 秋の夜の更行まゝに虫の音の心ほそくもなりまさるかな

829 秋ふかくなり行まゝに虫の音のきけは夜ことによはるなる哉

秋の深まりを弱りゆく虫の音によつて詠んだ歌としては『曾丹集』九月上(『私家集大成』中古I105)

251 ひとりえぬかせにこのはゝさそはれぬよな／＼むしはこゑよはりゆく

があり、虫・人・木の葉などの周囲の風物の衰えゆく具象から深まりゆく秋の淋しさ、侘しさが詠まれ、好忠の新奇な詠み方の一つとして注目される。

右の四首のうち、特に824・828・829の三首は好忠の歌を踏まえてゐるか判らないが秋の深まりという時間的な経過を弱まりゆく虫の声という現象によつて知ることを歌意として秋の哀愁の深化と共に述懐的要素をも織り込んでゐる。それは聴覚的な歌であり、新しい視点の詠作として、かなり目立つた特徴といえる。また、明らかに虫の弱まりゆく状態を題意の中に盛り込み、晩秋の風物として「虫」

をとらえていたことを示している。

『堀河百首』のこれら三首の類型的発想の影響は大きく、同百首以後の歌合や「虫」及び「暮秋」の題詠歌に多く詠まれてゐる。特に、堀河百首題にて詠まれた百首歌にその傾向が顕著にみられる。

『久安六年百首』(『群書類従』)の中納言右衛門督公能の秋二百首のうち

夜を重ね声弱り行く虫の音に秋の暮れぬるほとを知るかな

とあり、また、藤原俊成が堀河百首題を述懐に寄せて詠んだ『述懐百首』のうち

さりともと思ふ心も虫の音も弱り果てぬる秋の暮哉(『長秋詠藻』152)

とあり、三首の同型的発想から詠まれたものと考えられる。

以上のことから、「虫」の歌題は虫の鳴く盛りを詠むという古今以来の伝統的なとらえ方のみでなく、弱りゆく虫の声と秋の深まりとを対比的に見るとらえ方が当代の感受性のパターンとして新たに成立しており、さらに述懐性が浸透した歌題のイメージを形成し、『堀河百首』以後、「虫」という歌題が述懐性を内包する歌題として意識されることが指摘できる。